

日本触媒の姫路事業所の爆発事故を受け、塗料メーカーの間で対応を模索する動きが広がっている。原料のアクリル酸エステルは、10月出荷分はほとんどが立っているが、来月以降は未定と口を揃える。新たな調達先の確保や自社の在庫を代替の利かない製品に優先配分することなどが検討されている。一方、景気減速もあり世界的に在庫は余剰感がある。国内アクリル酸エステルメーカーとして、増産やクロールバル調達で一定量をカバーできるとみる向きもある。アクリル酸エステルは塗料や粘着剤、接着剤の原料、改質剤、アクリル

アクリル酸エステル 塗料メーカー、対応模索

繊維など幅広い用途がある。このうち塗料分野では建築や自動車の新車・補修用などの原料として使われている。生産の十数%影響

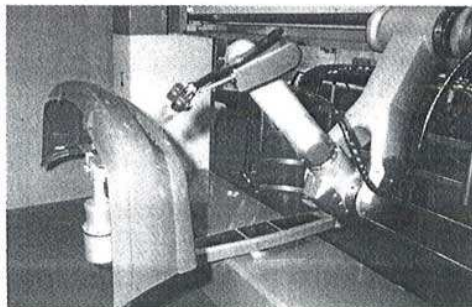
日本触媒の事故で

重なったことも先行きの不透明感を強める要因となっている。代替認める場合も

なかでも「産業界の裾野が広いために供給不安が与える影響が大きい」塗料メーカーと警戒感を強めるのが自動車用塗料だ。塗料メーカーの間では10月初旬から具体的な対応を模索する動きが広がり、国内外の他の調達

調達先確保や優先配分

自動車用で警戒感強める



自動車用塗料の原料となるアクリル酸エステル。塗料各社は11月以降の対応を模索している

先の確保やアクリル酸エステルは、10月以降の対応を模索している。塗料各社は11月以降の対応を模索している。塗料各社は11月以降の対応を模索している。

る(塗料メーカー)とい。結果的に生産ラインが止まったため大きな影響は出なかったが、昨年の東日本大震災直後も一時的に同様の対応がとられた。

増産に一定の余力

その一方、国内の増産余力とクロールバル調達で一定量をカバーできるとみる向きもある。日本触媒を除く国内のアクリル酸エステルの設備能力は合計で年産約28万トある。経済産業省の化学工業統計によると、7月の生産量は2万852トで稼働率は71.6%となっている。事故の影響にともなうアクリル酸や川下の樹脂の需給バランス、メーカーの自社消費分な

を勘案すると、大幅とはいかないまでも一定の増産余力はありそうだ。アクリル酸エステルメーカーも「余力は少ないが協力できる範囲で増産に応じる」としている。また、アクリル酸エステルはケミカルタンカーを使って長距離輸送できる。世界的な景気減速から在庫に余剰感があるなかで、クロールバル調達である程度は賄えるという指摘もある。自動車メーカーの今年度下期の生産計画が上期に比べ減産傾向にあり、需給見通しは最低1週間見通しは「塗料メーカー」という。メーカー各社は限られた時間のなかで慎重な検討を続けている。(小林徹也)

THE CHEMICAL DAILY

化学工業日報

2012年(平成24年)

10月16日 火曜日

第22449号(日刊、土・日・祝日除く)